
魔法少女リリカルなのは StrikerS ~小さな少年の小さな勇気~

海翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers ～小さな少年の小さな勇気～

【Nコード】

N0250Z

【作者名】

海翔

【あらすじ】

機動六課設立2年前フェイト・T・ハラウンによって救われた少年。その少年はフェイトの養子となり機動六課に出向する。そして、これから大きな事件へと巻き込まれる。若き魔導師の生き様を描いた物語。魔法少女リリカルなのは Strikers ～小さな少年の小さな勇気～ 始まります。

PL 出会い

PL

Sideフェイト

2年前……

私はその日執務官の仕事である組織を落とす段取りをしていた。その組織は魔導師臓器売買を主とする組織で、本局の魔導師もかなりの数が殺されている。

組織はそこそこ大きく、相手も魔導師を雇っているためこちらも魔導師の平均ランクをAA以上にする必要がある。

本局魔導師でも空戦、陸戦にとわずAAというのはそれほど多くない。

どう頑張っても少数精鋭の部隊になる。

「テストロツサ・ハラオウン執務官、準備が整いました」

「わかりました」

今回召集した人員の準備が整い、転移の準備も終了した。

「これより、敵本拠地に行きます。皆さん死なないでください」

そう言って、すぐに敵の本拠地に転移、臨戦態勢をとる。

敵が襲ってくる。

そう思って全員がデバイスを前に突き出す。

しかし

私たちの前に現れた光景は彼らの想像をはるかに超えるものだった。
いや

私も度胆を抜かれた。

私たちの目の前にあったのは

死体

ただそれだけだった。

それもただ殺されているだけではない。

ある者は腸をぶちまけ、

またある者は頭を破壊され、脳をあらわにし、

またある者は首から上が切断され、

またある者は下半身が丸ごとなくなっている。

そんな死体

いや

”もの”だった。

それも理解した瞬間、死体が放つ独特の異臭が鼻を突く。

胃の中のものが逆流するのを感じる。

それを必至に堪える。

しかし、後ろの隊員は我慢できずに嘔吐する。

吐き気を耐えきった私は隊員に告げる。

「気分の優れない者は艦隊に引き返してください」

それを聞き隊員たちは次々と戦場を離脱。

結果残ったのは私を含めたら名だけだった。

「それでは行きます」

ゆっくりだけど確実に一歩一歩進み続ける。

もちろん警戒は怠らない。

そばらく歩くと、小さな人影が見えた。
ゆっくりと近づき、影と私たちの距離は10mくらいになった。

「……………」

近づいたからわかるが影の正体はまだ体も出来上がっていない子供
だった。

背丈からして10歳もない。

その少年は右手に短いナイフを握っている。
左手にもよく見えないが何かを握っている。

「あなたはここで何をしていますか……………」

私は少年に聞く。

しかし、少年は何も答えない。

代わりにゆっくりと振り返ろうとする。

「……………」

私もバルディッシュを構える。

少年は振り返る。

少年の顔が光にさらされる。

「……………」

私は少年の表情に驚く。

少年は…………泣いていた。

表情自体は笑っている。

それでも、眼からは涙が流れている。
少年はそんな表情のまま告げる。

ボクヲコロシテクレルノ？

「な、に…？」

一人の隊員が驚いたようにつぶやく。
少年は尚も続ける。

ハヤクボクヲコロシテ

少年は一步づつこちらに近づく。

少年が近付いたおかげで少年の全体を光が照らす。

少年が照らされた瞬間、私たちに戦慄が走った。

少年の左手にはさつき見た首が切断された死体の頭が握られた。

ネエコロシテヨ？

少年はまた近づいてくる。

私たちは一步下がる。

しかし、ここで私は考えた。

なのはならこの状況をどうするだろう、と。

なのはならあの子に砲撃を浴びせるだろうか？

なのはならあの子を殺すだろうか？

なのはならあの子を見捨てるだろうか？

答えは

否

彼女ならこの子を助けるだろう。

彼女はこの子と話すだろう。

彼女なら

そう考えていたら、勝手に体が動いていた。

「私は、私たちは君を殺さないよ」

その言葉に少年は驚くことなく言葉を発する。

ナンデ？

そう彼はいった。

「君を救いたいから」

ゆっくりと言葉を紡ぐ私に隊員たちは啞然とする。

「何言っているんですか執務官！！」

「こんなにやばい子は早々に殺すべきです！！」

そんな心許無い言葉に私は頭に血が上る。

「黙ってください」

そういつとまた言葉を紡ぐ。

「私は君を助けたい。それが理由じゃ…ダメかな？」

彼は笑顔を崩さず、また歩みを止めない。

ダメダヨ、ボクハコロサレナキヤイケナインダ

「そんなことはないよ」

言葉を慎重に選びながら私もまた彼に向かって歩き出す。

ボクハシナナキヤイケナインダ

「なんで？」

ボクハイツパイヒトヲコロシタカラ

「殺したくて殺したんじゃないんでしょ？」

ソレデモコロシタコトニカワリハナイヨ

「じゃあ、私がそれを許してあげる」

お互いに歩み続けた結果、今私たちは向かい合っている。

あと一歩踏み込めば彼の体に触れることができるくらいに……。

ユルシテクレルノ？

「うん、私が許す。だから泣いてもいいんだよ？」

私は彼をやさしく包み込む。

「だから、一緒に行こう？」

そうして彼は静かに泣き始めた。

これが私と彼の出会い。

PL 出会い（後書き）

初めて二次創作に手を出してみました、いろいろ大変ですね。

今回はPLということで主人公の過去について書いてみましたが、なんか…こう…ひどくない？

グロくない？

ひどいですよ、これ。

主人公の過去に何があったか逆に気になります、おもに私が。

ということ、なのは二次創作〜小さな少年と小さな勇気〜を始めてみましたが、至らぬ点など多々あると思いますが、長い目で見ていただいたら幸いです。

あ、感想とか改善してほしい点などはどしどし言ってください。
がんばります。

おそらく不定期で行進になるとは思います。が気長にお待ちくれたら嬉しいです。

では、次は1話にて。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第1話 彼の始まり（前書き）

祝1話！！

最近小説を書くのがつらく感じる時があります……。なぜでしょう…？

でも！！

これだけは最後まで書いてみせる！！

今回なんかグダグダする予感が……。

気にしないことにしましょう。

気にしたら負けでしょう…たぶん。

では、魔法少女リリカルなのはStrikers ～小さな少年の
小さな勇気～

第1話 彼の始まり 始まります

第1話 彼の始まり

1話 彼の始まり

「ジユン、起きて」

「はあ〜い」

夢を見ていた……。

すごく懐かしい夢。

僕と母さんの出会いと始まりの事件。

荒んだ場所。

腐臭の匂いが漂うあの場所。

あのおいが嫌で……。

人を殺したという感触が嫌いで……。

自分をモルモットとしか見てないあの研究員たちが嫌で……。

そんな中僕は子供ながらに思った。

死にたい

そんな間違った考えから救ってくれた目の前の女性、フェイト・T・ハラオウンの力になりたくて……。

僕は陸士士官学校に入学した。

もちろんお金なんてなかった。だから、フェイトさんに当時土下座してまで頼もうとしていた。

しかし、フェイトさんは快諾して、さらに

『私の養子にならない?』

とまで言ってくれた。もちろん僕もこれを快諾した。

そして、士官学校を1年で首席卒業。

陸戦Bランクを取り、母さんの執務官補佐としてこれまで1年半務めてきた。

「ジユン？　どうかした？」

「いや…なんでもないよ、母さん」

「あんまり無茶したらダメだよ？」

「わかってるよ」

母さんの過保護っぷりは今に始まったことではないが、これではエリオさんやキャロさんも苦労するだろう。

「ジユン一等陸士、準備が整いました」

「ありがとうございます」

どうやら転送準備が終わったようだ。

「行こう、母さん」

「うん」

僕たちは1週間後から1年母さんの幼馴染である八神はやて二等陸

佐が今度立ち上げる新設部隊「遺失物管理部・機動六課」
フォワード

FWは全員新人。

いや

FWだけではない。

ロングアーチや整備士、デバイスマスターまでもが新人で構成されている。

そんな場所に僕が行ってもいいのか疑問だ。

「それではみなさん、しばらくのお別れですがしなない程度に頑張ってください」

「私たちは機動六課に行くけどみんなも元気だね？」

『ハイ!!!』

そう言っ僕たちは部隊員の人たちに別れを告げた。

場所は変わって陸戦Bランク試験場。

「あ、フェイトちゃん、ジュンくん」

ヘリポートで待っていたはやて二佐がぼくたちに手を振る。
母さんは手を振り返し、近づいていく。

「お疲れ様です、八神二佐」

軽く敬礼をする。

「久しぶりやね、ジュンくん。あとはやてでいいで」

「そんなわけにはいきません。非公式の場でも構わないか

も知れませんが、ここは公式の場ですので

「そんなこと言わなくてもいいんじゃないか？」

そう言っただけの中からは出てきたパイロット。

確か機動六課でヘリのパイロットをする

「ヴァイス陸曹ですね？」

「ああ、ジユンだったな」

「はい、ジユン・T・ハラオウン一等陸士です」

「よろしくな」

そして、僕たちはヘリに乗り込んだ。

「この二人がはやてが見つけた子たちだね？」

「うん、二人ともなかなか伸びしろがある子や」

えっと、スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士か。

階級僕より下じゃないか。

年齢上なのに…。

僕が異常なのか？

「うん、異常や」

「八神二佐、勝手に人の心読まないでください」

「異常じゃないわけないやろ？ 陸士士官学校を5歳で入学。1年後には首席卒業。その後フェイトちゃんの切り札として活躍。わずか7歳にして一等陸士」

「うん、ジュンは異常だね」

「異常っすね」

母さんだけは信じていたのに、あっさり肯定された…。泣きたい……。

「あ」

「どうしたんですか？」

「どうもサーチャーに流れ弾が当たったみたいなんよ」

どうせ、どちらかが無茶した結果だろう。

「なのはに任せよ」

そやね、とはやてが言ってる3人が見守る中、ランスター二士が出てくる。

全員が無茶、無謀と考えているだろう。でも僕は違う。

この2人は才能に満ち溢れている。だから僕はこの2人が絶対合格すると確信している。

「それでは、僕は仕事がありますので」

「あれ？　なんか仕事あつたっけ？」

母さんが疑問に思うが僕はゆっくりと首を横に振る。

「高町教導官が考えていることを先に用意するだけですよ」

「????？」

おそらく高町教導官はこう考えるだろう。

『実力や魔力値はBランクを超えているけど、危険行為により減点しかし、このまま陸戦Cランクでいるのは危ないので、本局の先輩からいろいろ学ぶための推薦状を用意した。』

3、4日後には再試験が受けれるように手配しよう『』
とまあこんな感じだろう。

地上本部の顔見知り結構多いので頼めばやってくれるでしょう。

「では、お先に失礼します」

「あ、うん。お疲れ様……」

さて、高町教導官と僕の信頼できる先輩は……。

「いるのかな……?」

そう呟いて、ジュンはヘリから飛び降りた。

「フェイトちゃん、ジュンくん大丈夫なん？」

「うん、大丈夫。一応飛べるから」

そういう意味やないんやけど、と思うはやてであった。

所変わってとある一室。

「部隊名は『時空管理局本局・遺失物管理部・機動六課』!!」

「登録は陸士部隊。FW陣は陸が主軸やな」

八神はやては自分が部隊長を務める部隊のあらましをスバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士に説明していた。

そして、その時ジユンはというと

「高町教導官」

「ん？ あ、ジユンくん!! 久し振りー!!」

「はい、お久しぶりです高町教導官」

ジユンは軽く敬礼をする。

そんなジユンに苦笑するのは。

「どうしたの？ なんか用事？」

「はい、高町教導官にこれを」

ジューンのはに封筒と中に入れる書類を渡す。

「なにこれ？」

「本局の先輩たちによる講習。その承認の書類です。必要かと思いまして勝手に用意させてもらいました」

「いいよ、ありがとう。助かったよ」

「では」

S i d e なのは

「では」

そう言って引き返していく。
あれ？

「フエイトちゃんのとこにはいかないの？」

「まだ仕事があるものですから」

ジューンくんはそのまま歩いて行った。

執務官補佐って忙しいのかな？

S i d e O u t

「ヤバいな、遅れてる」

あれから1週間の時間がたち、機動六課設立のあいさつの時間にジユンは六課隊舎内を走っている。

ジユンは昨日地上本部の会議のセッティングに思ったより時間がとられ、気がついたら朝日が昇っていた。

八神部隊長の挨拶まで多少時間があつたので仮眠をとっていたら……

「じさんの有様さ……。ん？」

ジユンが隊舎を走っている途中、なのはが視界に入りなのはの方向に向きをかえ再び走る。

「高町教官」

「あ、ジユンくん。遅刻だよ」

「申し訳ありません……」

ジユンはもう魔王モードにならないことを祈り、謝る。

「あとで、はやてちゃんに挨拶するんだよ？」

「はい……」

「じゃあ行こうか」

このとき、ジユンは疑問を抱いた。

この後のジユンの予定は、会議に出席し書類をまとめ、シャワーを

浴びて寝ることだった。

やっていることは少ないが実はこれはすごく大変で、会議に出席した時には一字一句間違つことなくそれぞれ先方の言ったことなど記録しなければならぬ。

これはジユンが勝手にやっていることだが、ごく稀に会議で言っていた内容と違うといちやもんをつける輩がいるからだ。

これの対処に困っていた母さんに何かいいアイデアはないか、と聞かれてこれを始めた。

それでも、長くやっているときーをたたくスピードは上がるがそれほどばかりにかまけている暇は執務官補佐にはない。

時には執務官の意見の穴を突いた輩の穴を突き返したりとやることは山づみだ。

だから、母さんの補佐は結構気疲れするのだ。

しかもそれを母さんに気づかれないように振る舞わなければならない。

そんな仕事があるのに高町教導官は”じゃあ行こうか”といった。

4人のFWメンバーを後ろにひきつれて。

ここまでくればもう明らかだ。

ようは”訓練行こうよ”ということだろう。

しかも教導官は高町なのは。

これはもう必然的に『ジユンくんの実力が知りたいから模擬選やろうか?』という展開が目に見えている……。

「いや、でもフェイト執務官の許可が」

取れてませんと続けようとしたが

「フェイトちゃんの許可なら取ってるよ?」

ジユンの逃げ道は早々に崩れ落ちた。

「わかりました……」

しょうがないのでなのは後についていくジュン。
哀れジュン……。

訓練場につき、FWとの自己紹介が終わっていないので自己紹介をしるとの魔 もとい、高町教導官がおっしゃった。

「なんか魔王って聞こえた気が……」

「気のせいでしょう？」

「じゃあ、自己紹介しようか。スバルから」

「はい！！ スバル・ナカジマ二等陸士です！！」

「スバル、何階級下の子に敬語使ってるのよ。ティアナ・ランスタ
ー二等陸士よ。よろしくね」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。こっちはフリード」

「キュクル」

「エリオ・モンディアル三等陸士。よろしく」

じゃあ、次はジュンくんだね、と促させるまま順は自己紹介をした。

「えっと、ジュン・T・ハラウン執務官補佐です。階級は一等陸

士です」

最後によりしくお願いしますと付け加え、きれいな敬礼をする。

「「「「ええ〜!!!」「」「」

「一等陸士って年齢は!？」

ティアナがすぐに質問する。

「フオですね」

「テストロツサ・ハラウンっていうのは!？」

「フェイト・T・ハラウンは僕の母さんです」

「じゃあ、ジュン一等陸士がフェイトさんの切り札って言われていてる!？」

「世間一般ではそう言われてるそうですね」

みんなもう黙りこくる。

すると、ティアナがいち早く我に返り叫ぶ。

「失礼しました、ジュン一等陸士!!!」

きれいな敬礼を見せる。

そのあとに続いてFW全員が失礼しました、と言って同じく敬礼をする。

ジュンはおろおろしてどうしようか迷っている様子。

それを見て、後ろで腹を抱えて笑うのは。

「いや、あのですね…僕のことは呼び捨てでいいですよ」

「はあ…しかし」

それでもティアナは下がらない。

「年下に敬語って嫌じゃないですか？」

「いえ、そんなことは…！」

ジyunはやれやれと言って言葉を紡ぐ。

「僕はさ、尊敬すべきは”階級”ではなく”年齢”だと思っんです」

「”年齢”ですか…？」

「うん。”階級”は各々（おのおの）が上げた戦績を示すけど、”年齢”は各々が歩んできた人生を示します。そして、さっき言ったのを詳しく言えば、尊敬すべきは”人生”であって”戦績”ではない。確かに軍人として何より大切なのは軍規と階級、そして命令です。だけど、人として大事なものは敬愛するということとは思いませんか？」

「は、はあ……」

「どんな人でもそれぞれに歩んできた人生があります。人によっては悲しい過去や苦しいことだってあったかもしれませぬ。でも、その人は今を生きているんです。自分よりはるか多い年月を」

F W陣はもちろん、さっきまで笑っていたのはさえもすっかり聞いている。

それほどにジユンの言葉は重く感じた。

この場の全員が思うことだろう。

彼に一体何があったのかと

一体なぜ彼はここまで考えたのだろう

彼はここまで追い込まれていた時期があったのだろうか
たった7歳の彼に一体何が と。

「しかし、その人の階級は三等陸士です。つらい過去を持ったにもかかわらず。そんな人を顎で使う人もいるかもしれない。ですが、僕はそんな人になりたくはない。そう思ったからこそ僕はこの持論を掲げているのです」

「ですので、僕のことはいかが”ジユン”と読んでください」

「……」

「ダメですか？」

「……」

ジユンは自分の思いをすべて話した。それでも呼んでくれないのかと思うと何のために話したのか分からなくなる。

しかし、ティアナたちF W陣はなにも返せない。

「……ダメならだめで結構ですよ？ 自分の持論を他人に押し付けることはしませんから」

ジユンは優しく言う。

別に彼女たちが悪いわけではない。

でも、自分が悪いわけでもない。

それでも、自分の考えが否定されたようで悔しくなる。

「高町教導官、訓練を始めましょう」

「あ、う」

「ジユン」

なのはの返事に割って入るような感じでスバルがジユンの名前をつぶやく。

その言葉にジユンは目を見開いた。

「ジユン」

「ジユンさん」

「ジユン」

スバルに続いてティアナ、キャロ、エリオの順でジユンの名前を呼んで行く。

そして、ジユンは

「はいっ！！」

満面の笑みで返事をした。

それが機動六課での彼の始まり

第1話 彼の始まり（後書き）

ということで、第1話 彼の始まり どうでしたか？

なんかグダグダなような、そうでないような……。そんな感じが否めませんね。

それにしても、いや〜主人公の身にいったい何があったんでしょ？
ね？

おもにフェイトに出会う前。

作者のはずの私が一番気になっていると思うのですが……。何と行き当たりばったりな小説！！

落ちが決まっていけないのに書くとは！！
愚かなり私！！

まあでもそんなものでしょ？

ああにしてもジュンくんの変わり具合が半端ない……。

もともとですね、ジュンくんは”仕事ができるが人見知り”なかわいい男の”娘”にする予定だったんですよ！？

それなのに……それなのに！！

いつの間にか外見に見合わない精神年齢の少年に……！！

ああ〜本当のジュンくん帰ってきて〜！！

まあそんなことはさておき、どうです、1話。

なかなかいいで きではないですね、ハイ。

楽しんでくれているなら幸いです、そうでない方は読むのをやめることをお勧めします。

もうしばらくはこんな感じで進むんで、見苦しいと思います。

それでもいいという方はぜひ見てあげてください。

これはもう趣味に近いので。

では今回はこの辺で。

次は2話ですね。

できるだけ早く仕上げるので遅くともものぞきに来てくれたらうれしいです。

第2話 模擬戦（前書き）

FWメンバーとの自己紹介も終わってこれから訓練！！という時に
なのはから模擬戦の話が持ち上がる。

それをある程度察知していた彼 ジュン・T・ハラウンは諦め
て模擬戦をやることに……。

ジュンは一体どうなるのか…？

それでは

魔法少女リリカルなのは StrikerS 小さな少年の小さな
な勇気

第2話 模擬戦 始まります。

私は戦闘シーンを描くのが下手なので、見てられないと思う方は
見ないほうがいいと思います。

第2話 模擬戦

第2話 模擬戦

Side ジュン

「ジュンくん、模擬戦しようか」

自己紹介が終わって高町教導官が模擬戦の準備をしながら言う。

「了解しました……」

僕はもう半ばやけくそ気味に高町教導官に従った。

「デバイスのこと聞いていい？」

僕はいいですよ、と答えて模擬戦の場所の地理を確認する。

「ジュンくんはミッド式？ それともベルカ？」

「ミッドです」

「デバイスの形状は？」

「ナイフです」

高町教導官はなるほど、と考えこむ。
相手が高町教導官なら僕の最も苦手とする距離^{レンジ}。
おそらく普通にやったら負けるだろう。
秘策でもない限りは…。

「相手は私でいい?」

「僕は構いませんが…」

僕がそう言うはただ一つ。

こここの部隊長が八神二佐なら当然守護騎士もいるわけで…。
ということは、シグナム二尉がいるということ。

なぜシグナム二尉が嫌かって?

そんなあの人が戦闘マニア（バトルジャンキー）だからだ。

僕自身は戦ったことはないけど、フェイト執務官は結構戦っている。
フェイト執務官との戦闘を見ていると、あの人がニヤリと笑うのが
見える。

そんな人が僕の模擬戦相手になったらと思うと……体が震えるよ。

「待て、高町。武器が刃物なら私が妥当だろう?」

ほら来たよ、言ってるそばから。

「私は別にいいけど……。フェイトちゃんに『シグナムとは戦わせた
らダメ』って言われてて……」

「むう」

「だから、ごめんね? シグナムさん」

「私とて新人相手に手加減ぐらいできる!！」

あれ？

シグナム二尉何か勘違いしてないか？

「ああ、違うの。フェイトちゃんがね『シグナムは初見でジュンには勝てないから』って」

「私が新人に負けるといいたいのか、テストロッサは…」

「よかろう!! 私か新人に劣っていないことを証明してやるう!

! 来い、小僧!！」

えー…。

結局模擬戦の相手はシグナム二尉に…。

泣いていい…？

S I d e O u t

現在シグナムとジュンは模擬戦のため、向かい合ってバリアジャケットを展開している。

ジュンのバリアジャケットは、基本的にはフェイトを参考にしているためスカートがズボンになったこと以外はさして変わらない。軍服調の黒いバリアジャケット。

ついでに、マントはジュンが邪魔と言ったのでない。

「では、始めようか」

シグナムの言葉にジュンは頷く。

『じゃあ、始め！！』

なのはの合図とともにまっすぐジュンに向かうシグナム。ジュンはそれを見て、とっさに後ろに飛び退く。

「甘い！！」

が、シグナムはジュンに向かってなおも走る。そして、力いっぱいレヴァンティンを振るう。

「剣をよけたくば後ろに下がるなんて愚行はよすんだな！！」

「後ろに下がることは愚行ではありませんよ、シグナム二尉」

その言葉と共にジュンはゆっくりと姿を消してゆく。

「っ！？」

シグナムはジュンが消えた位置を空振りする。

すぐさま後ろに跳びジュンがいた位置から距離をとる。

（なんだ、今は…？ 幻術？ いや、ジュンの稀少技能^{レアスキル}か？）

「そうですね、シグナム二尉。僕の稀少技能^{レアスキル}：名を『インビジブル』
と言います。その名の通り、僕の姿を消す能力です」

「なるほどな……」

シグナムはこれは厄介だ、と考える。
姿を消すだけならば、達人は気配から位置を探ることができる。
だが、もし、ジユンの『インビジブル』に気配も消す能力までもが
付与されているならば、相手に悟られず相手を無力化できる。
危険極まりないレアスキル。
しかし、レアスキルにも弱点が存在するものもある。
何かを代償にそのスキルを使っている可能性は十分にある。

(一体何を払っているのか…それを見極めれば私の勝ちだ!!)

「考えてる暇はありませんよ」

「何!？」

不意に、声が後ろからしたので、振り返れば姿を現したジユンがナイフを振るっていた。
とっさにレヴァンティンをかざし、それを防ぐとジユンは再び消えていった。

「なんと厄介な……」

戦闘は視覚で行っている部分が多いため、多くの戦士は見えない攻撃に怯え、やられる。

今のシグナムのように簡単に不覚を取る。

「次行きますよ!!」

その声と同時に後ろからナイフが一本投擲なげされる。
シグナムは普通にレヴァンティンで上に弾く。

「取った!!」

言葉と同時に姿を現すジユン。

ジユンはシグナムの上をとった。

上にはじかれたナイフをジユンはキャッチ。

そのままシグナムに向かって一直線に落ちる。

「ちっ…!!」

再びレヴァンティンをかざし、それを避ける。

ジユンはレヴァンティンを踏み台にしてシグナムのはるか後方に下がる。

そして、『インビジブル』を発動。

シグナムの前から姿を消す。

Sideシグナム

ふむ。ジユンの戦い方は理解した。

相手の目の前から姿を消し、不意を突く。

戦術の基礎を生かした戦い方。

だが、その戦い方には弱点がある。

ジユンのレアスキル『インビジブル』は攻撃前には必ず解ける。

そういう制約のもとで発動できるのか、または消える時間に制限があるのかは疑問だが攻撃の前に溶けていることが今は重要。

こいつは伸びる。

ジユンは頭がいい。攻撃も7歳にしては鋭い。作戦もいい。剣筋つといていいかは疑問だが、それも結構高いラックだ。

何より私はジユンの面構えが好きだ。

一流の剣士の顔をしている。

凛々しく、諦めず、それでいて強い。

だからこそ、ここで私が敗北の味を味あわせなければ奴はいつか落ちる。

高町のように……。

私は不器用だからな。

こんなことでしか貴様を守れん。

だが、私は不器用なりにこいつを守りたい。そう思えた。

主はやて、テストロッサ……。すまない。

私はこいつのためにこいつを斬る！！

「レヴァンティン！！」

ロードカートリッジ

「紫電」

「一閃！！」

Side Out

シグナムがカートリッジを排出する。

それと同時にジユンは真正面からシグナムに突撃する。

「紫電」

レヴァンティンに炎熱効果が付与される。
それを見てもスピードは緩めない。
ナイフを振るった一瞬、ジュンの体が現れる。

「一閃!！」

レヴァンティンが振るわれ、ジュンの体に直撃が、しかし

「な!?!」

ジュンの体は一瞬で消えさる。
ティアナのフェイクシルエットのよう…。
そして、ジュンは後ろからシグナムに手刀を繰り出す。

「がつ!！」

そのまま、シグナムは崩れ落ちた。

模擬戦4時間後。

「つ!…! こっは…!」

「医務室ですよ」

シグナムは模擬戦で落ちてから4時間きっかりで起きた。

「シャマル…そうか、負けたのか…」

「シャマル、シグナム起きた？」

シグナムが起きてすぐにはやてが入ってくる。

驚いたが数時間前に帰ってきたのだろーと思ひ、シグナムは申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません。負けてしまいました」

「それはええよ。それより、ジュンくんのことについて分かったことある？」

ある程度予測していたのか、シグナムはすぐに答えだした。

「あのレアスキルは危険です。どこまで何を消せるのか、それが初見ではわかりません。さらに奴は頭が切れる。どのような状況から相手の弱点や隙を見つけるかわかりませんし、それを相手に悟らせることもありません。あの能力は異常です」

はやてはふむ、と考え込んで、体長陣とジュンを部隊長室に集まるように念話を飛ばした。

5分後。

全員が集合し、はやてが率直に聞きに行く。

「ジュンくん、あの『インビジブル』とやらの事詳しく説明してくれへんか？」

「『インビジブル』？ そんなスキルないですよ、僕は」
そこにいた全員がえ、っという顔をする。
ちなみに、フェイトを除く。

S i d e ジ ユ ン

みんな何を言ってるんだろう？

「じゃあ、あれは一体……？」

シグナム二尉が聞いてくる。

あれ、言ってなかったっけ？

でも八神二佐が知らないのはおかしい。

「八神二佐、書類すっかり目を通しましたか？」

「え、いや。まだやけど……」

「では、この際です。僕の能力を話しましょう」

あんまり気が進まないけど。

「僕が使った『インビジブル』なる能力。そんなの存在しません」

「……は……？」

「僕が使えるのはフェイト執務官が使える『ソニックムーブ』と『幻術』だけです」

「え、でも…模擬戦してるときモニター越しに見たけどそんな様子はなかったし私たちにも消えたように見えてたよ？」

高町教導官の質問にみんながうなずく。

これ僕の切り札なんだけど…。

「僕の幻術は少し強すぎるみたいで、機械越しにでも少しだけ効くんです」

まあ、今はこの認識でいいか。
面倒だし。

「では、説明しますね。僕は射撃魔法や一撃必殺と言えるレベルの魔法がないので、相手と対峙した時に決め手に欠けます。それを単純に幻術で補っているだけです」

「補うってどうやってなん？」

まあそこだけ聞いたらよくわかりませんよね。

「まずは模擬戦のことについて解説します。僕は長期戦には向きませんが、せんから模擬戦は短期決戦で決めなければなりません。そこで、まず相手であるシグナム二尉に幻術をかけます。僕が”消える”という内容です。次に言葉によって相手の思考を制限します」

「思考の制限？」

ええ、と高町教導官に返事する。

「シグナム二尉はおそらくはじめに”幻術”という可能性を考え、次に”レアスキル”の可能性を考えたはずです」

シグナム二尉が自分の考えが読まれていたのが悔しいのか、むっとした表情で返す。

「ああ、そうだ」

「そこで僕は”消える”ことが”レアスキル”かのように話します。そのあとシグナム二尉は完全に”レアスキル”と判断し、弱点を探そうとします」

実際シグナム二尉は弱点を探すために防戦に徹していた。

「次に弱点をわざと露見させます。今回の場合は”攻撃時に姿を現す”というものでした。そして、シグナム二尉はそれを本格的に弱点と判断。それに合わせて必殺の一撃を決めれば終わるとみまます」

確かにあの時、シグナム二尉は紫電一閃のためにカートリッジを排出した。

あれが決まれば負けてましたが。

「シグナム二尉が弱点と判断した後にまっすぐに突っ込みます。そして、姿が現れればそれを”本物”と思い、紫電一閃を放つでしょう。そう予測しました。見事にシグナム二尉ははまってくれました。そのあとは僕がシグナム二尉の後ろに回り、昏倒する一撃を放つだけですよ」

「シグナム二尉の反省点は”レアスキル”だと信じてしまったことと、”撃時に姿を現す”ことを弱点と判断するには早計だったこと

ですね」

以上です、と言って話を終える。

「質問は？」

皆さん何も言っていないので、失礼しますと言って部隊長室を出ていく。

あんまり話したくなかったんだけどな…。

幻術は僕の切り札だし、口がうまいのも一応幻術が切り札足りえる要因の一つだし。

Side Out

「いや…危険すぎるやろ…彼」

守護騎士一同が頷き同意する。

「ジュンがね　ジュンがなんて言われているのか知ってる？」

フェイトが言って全員で考える、がやがて全員が首を振る。

「絶対強者”らしいよ」

それを聞いてその場にいた全員が息をのむ。

相手が自分の情報を持ってない限り負けることはほぼありえない。

しかし、ジュンは数限りない変化をピックアップし、その中から最も有効な手段を考える力があり、それを実行する度胸もある。

さらに、戦場では彼は常に冷静。
指揮官の才能もあり、戦闘では単独でSランク魔導師を抑えるほどの力。

これを見た武装隊の魔導師がつばやいたそうだ。

彼こそ絶対強者と呼ぶにふさわしい

と。その次の日からジューンは”絶対強者”と言われついでに”フェイト執務官の切り札”と呼ばれた。だした。

数少ない魔法を駆使して
幻術を巧みに操り
相手に悟られずに背後をとる。
この戦い方はまさに

「 暗殺者、やね」

第2話 模擬戦（後書き）

さて、第2話ということですが、どうでしたか？

あ、言いたいことはわかります。

戦闘シーン書くの下手すぎと言いたいんですよね？

そんなことは自分でもわかっていますとも……。

なぜ私は戦闘シーンをうまく書けないのか疑問です。

一種のコンプレックスといってもいいかもしれません。

PLは投稿してない作品でも毎回シリアスに書けるんですがね？

でも力が入るのって最初と最後だけなんですよね…私は。

意外とあっさり負けましたね、シグナムさん。

打ち合っすらいませんし。

もはや相手がシグナムの意味がありませんね。

まあ、彼女も生粋の”バトルジャンキー戦闘狂”ですから喜んでくれているでしょう。

では今回はこの辺で、次回、おそらく一気に飛ばしてファーストアラート辺りまで行くと思われませう。

それでは、最後まで読んでいただきありがとうございました。

第3話 ファーストアラート 前編（前書き）

赤ボールペンさん感想ありがとうございます。
これからも頑張ります！！

さて、これで3話ですね。

不定期で更新と言ってましたが、なかなか進めるの早いと思っ
てる今日この頃です。

前回の模擬戦ではジュンくんの思慮の深さを垣間見ました。
7歳のくせにずいぶん考えるんですね、あの子。

模擬戦が終わって、自分の切り札を早くも公開したジュン。

そんな彼の初陣は一体どういうものになるのか…。

では、魔法少女リリカルなのは Strikers ～小さな少年
の小さな勇気～

第3話 ファーストアラート 前編 始まります

第3話 ファーストアラート 前編

第3話 ファーストアラート 前編

Side ジュン

模擬戦のあと隊長陣に僕の能力説明があつた。
すぐに終わったからいいが、あまり人に話したくない内容だ。
僕の切り札は幻術だけ。

ランスター陸士みたいに射撃ができるわけでもないし、モンディア
ル陸士みたいな一撃必殺を持っているわけでもない。ましてや、ル
シエ陸士のように完全なフルバックでもない。
ナカジマ陸士のように前線で攻撃を耐え切る防御力も力もない。

「結局僕はあいまいなだけだ……」

部屋に帰ろうとしたが部屋がどこにあるかもわからずモンディアル
陸士に念話を飛ばした。

《モンディアル陸士》

《なに、ジュン》

《僕とモンディアル陸士は同じ部屋でしょうか？》

《え、違うよ？》

違うのか……。
なら、母さんに聞こう。

《フェイト執務官、僕の部屋はどこでしょう？》

《えっと、待ってて。今行くから一緒に行こう？》

《わかりました》

待つこと10分。

「お待たせ、行こうか」

「はい」

それから歩くこと数分。

女性寮についた。

まあ、僕はまだ7歳だし、問題はないが……。

「ここだよ」

「母さん、ここには『テストロッサ・ハラウン&高町なのは』って書いてますけど？」

「ジユンもテストロッサ・ハラウンでしょ？」

「高町教導官は了承しているのですか？」

「うん、してるよ」

Side Out

Sideなのは

部屋の外で声がある。

「高町教導官は了承してるのですか？」

「うん、してるよ」

ああ。何となくわかった。

フェイトちゃんジュンくんに言わなかったんだ。
私たちと同室のこと。

「とりあえず入る？」

そう言っつてフェイトちゃんはジュンくんを中に入れる。

「なのはさん…いいんですか？ 僕と一緒に」

さっき業務時間が過ぎたのでいつも通り話してくれるジュンくん。

「うん、いいよ」

「僕は遠慮したいんですが…」

フェイトちゃんがええ！！ と声を上げる。

フェイトちゃん…その声まぬけ過ぎるよ……。

「ジユンが一緒じゃないと眠れないよ!！」

「どっして?」

私が疑問に思ったことを口にする、フェイトちゃんはものすごい勢いで近寄ってくる。

「なのはは知らないと思うけどジユンのだ着心地は最高なんだから!！一回ジユンを抱いてからもうジユンなしでは不眠症になるんだよ!！」

「そ、そんなに……?」

恐る恐る聞くとフェイトちゃんは力強く頷く。

「なんならなのはも今日抱いて寝るといいよ!！ベットは3人用の一つだから私たちの間にジユンを置けば2人で抱いて寝れるし!！」

「う、うん……」

そうして、ジユンくんを間において眠りについた。

ジユンくんを抱いて寝た次の日から私もジユンくんなしでは眠れなくなりました…。

Side Out

ジュンの模擬戦から数週間がたった。

ジュンは模擬戦の結果からあの戦い方が定着しているため、なのは何も教えられなかった。

基礎訓練で基礎向上を図ったが、ジュンの基礎は驚くほどに洗礼されていた。

体力は六課の誰よりも高く、指揮官としての能力も高い。

自分の役割をしっかりと理解しているため、無理することもまったくない。

そのため、ジュンには当初”ライトニング05”として入隊させるつもりがFW全体の指揮をする”ファントム01”となっている。

基本的にはティアナにすべて任せるが、間違えたときや最善の策の一手手前の場合のみに口を出す。

ティアナははじめ納得いかないようだったが、ジュンのほうが経験が多いためしぶしぶ承諾。

そして、訓練でスバル自作デバイスのローラーがオーバーヒート。そのまま実戦用デバイスに切り替えるためシャーリーのところに来ていた。

S i d e ジュン

「あ、これジュンくんのデバイスね」

そういつてフィニーノ陸士は僕のデバイスの待機状態（スポンにぶら下げているチェーン）のものを渡してきた。

「これは？」

「ジユンくんのデバイスにAIをつけたのと、フェイトさんからの指示でナイフを2本、小太刀を一本追加しました」

小太刀？

なんだそれ？

太刀ってなんだ？

小っつてくらいだから太刀っていうのの小さい奴だろ？

「まあ、リミッターのことは頭の端にでも置いておくといいよ。今はそれよりデバイスのこと」

おっと、高町教導官来ていたのか。

話聞いとかなきゃ”お話”されてしまう。

魔王の”お話”は有名だから…。

それに僕は母さんから実体験を聞いたし……。
思い出しただけで震えが止まらない…。

「ジユンくん、寒いのか？」

「いえ……大丈夫です」

「そ？ 寒いなら言ってね、風邪だと大変だから」

はい、と短く返事をして高町教導官は話を続ける。

すると、第一級警戒態勢のアラート音が鳴り響く。

S I d e O u t

S i d eなのは

第一級警戒態勢のアラートが鳴り、グリフェスくんにつなぐ。

「グリフェスくん!!」

「ハイ!!」

「なのは隊長、フェイト隊長、こちらはやて!!」

「状況は!?!」

私は早く状況が知りたくてはやてちゃんに聞く。

が、その答えははやてちゃんからではなく、もっと近くから聞こえた。

「状況は把握しました」

「え?」

それはジュンくんだった。

ジュンくんはいつの間にかシャーリーの席を奪いコンソールを叩いていた。

「グランセニック陸曹はヘリの離陸準備を!! フェイト隊長の市街地個人飛行許可承認!! FWメンバーヘリへ早く!! ロング

アーチ、サーチャーで空の警戒を!!」

ジュンくんはこの場でできる限りのことを全員へ指示した。全員が一瞬ポカンとしていたが、すぐに返事をして配置につく。

「高町隊長も早くへりへ。状況はそこで説明します」

「あ、うん」

ということではりに搭乗しました。

「では説明します。現在、ガジェットドローン?型はリニアレールで護送中だったレリックを発見。これを襲撃しています。おそらくガジェット?型が空から来るだろうと思われま。?型は隊長のお二人に任せます。リイン曹長は現場管制をお願いします。?型の大型タイプはできるだけ戦闘しないようにして、僕かリイン曹長に任せてください。尚、リイン曹長にはリニアレールの停止も担当してもらいます。何か質問は?」

はい、ありません。

というか、あるわけありません。

ご丁寧にもありがとうございます。

というか、こんなにジュンくんってスペック高かったんだ……。フェイトちゃんが手放したくない気持ちもわかるよ……。

『なのはさん、ジュンくん、ガジェット?型が来ました!!』

……。

本当に着ちゃったよ……。

「では、高町隊長、フェイト隊長空は任せます」

「うん、わかったよ」

「じゃあ、ちよつと出てくるけど、みんなもがんばってズバツとや
っつけちゃおー!」

「「ハイ!!」」

うん、いい返事。

この分ならみんな大丈夫かな。

「ハイ!!」

キヤロはちよつと緊張してるのかな？
隊長の私が励まさなきゃ。

「キヤロ、大丈夫。そんなに緊張しなくても。離れてても通信でつ
ながってる。ピンチの時は助け合えるし、キヤロの魔法はみんなを
守ってあげられる優しくて、強い力なんだからね？」

キヤロの頬をやさしく包みこんであげる。

大丈夫だよ、キヤロ。

standby lady

「レイジングハート、セエエツトアップ!!」

SideOut

S i d e ジュン

高町隊長はフエイト隊長は空へ向かった。

ルシエ陸士が緊張していることは勿論わかっていた。

でも、僕が何か言ったところで何も変わらない。

それも理解していた。

だから、みんなには飽になってもらって、僕が鞭になる。

「ルシエ陸士」

「はい」

「緊張するのは悪くないです。それは仕方のないことです。でも、現場ではミスしないようお願いします。今回の事件は幸い僕や隊長たち、ライン曹長が近くにいるのでフォローしますが、単独での任務は一つのミスが命取りになるのです。そこをしっかりとしっかり理解し、落ち着いて。けれど素早く判断するのです」

「ハイ……」

「ジュン、ちょっと言いすぎじゃない？」

ナカジマ陸士がそう言うてくるが……

「ナカジマ陸士、現場では基本的に上司の言うことには絶対です。私は一応FWの直接の上司ということになっていますのであしからず」

ナカジマ陸士が反論してこない。
それでもランスター陸士はこつちを睨んでいます…。

誰かが飴を与えるなら誰かだ鞭を…。
でも、僕では鞭は与えられるけど飴は与えられない。
なら与えられるほうをあげるまで。
嫌われ役はなれている。

「さて、隊長さんたちが空を抑えてくれるのおかげで安全無事に
効果ポイントへ到着だ」

「では、僕から行きます」

「ファントム01 ジュン・T・ハラオウン。行きます」

そう告げ、僕はへりから飛び降りた。

第3話 ファーストアラート 前編（後書き）

.....。

結局戦わないのかよ!!

書いていた私も思いましたよ...。

にしても、ジユンくんは優しいですね。

嫌われ役を買って出るとか私にはできません。

彼は六課に来る前にもこんなことをしてたんですかねえ...。

まあ、そんなことはどうでもいいんですよ。

3話どうでしたか？

私的にはやっとファーストアラートかって感じですけど。

私的には早くホテルアグスタを書きたいです。

あゝまだまだ書きたいところがいっぱいある...。

でも、とりあえず当面の目標はアグスタです。

今回はこの辺で。

次は4話ですね。

タイトルなんて決まっていますよ。

ファーストアラート 後編に決まってるじゃないですか。
では次は4話にて...。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0250z/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS ~小さな少年の小さな勇気~

2011年12月8日23時49分発行